



Title	『絵本太閤記』 「淀君行状」と『唐土の吉野』
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	語文. 2020, 114, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『絵本太閤記』『淀君行状』と『唐土の吉野』

飯 倉 洋 一

はじめに

『絵本太閤記』は七篇、各篇半紙本十二卷十二冊、合計八十四冊の歴史長編で、豊臣秀吉の一代記。版元は大坂の勝尾屋六兵衛。上方特有の多くの挿絵をもついわゆる絵本読本である。本作も全体の約四割が挿絵となっている。武内確斎が作文、岡田玉山が作画した。初篇は寛政九年（一七九七）刊。二・三篇が同十年、四・五篇が同十一年、六篇が享和元年（一八〇一）、七篇が同二年に刊行され、『絵本楠公記』とともに大いに世に行われた（『絵本曾我物語』享和三年（一八〇三）一割咲居士序）が、文化元年（一八〇四）六月、絶板を命ぜられた。

本作は非常な人気を博したため、当時の演劇から現代の歴史小説や映画・ドラマにいたるまで、太閤記物に与えた影響は極めて大きい。その内容についての研究は乏しいのが現状と言わざるを得ない。本論では、『絵本太閤記』七編末尾近くの「淀君行状」を検討し、本作の作品研究をわずかでも前進させたい。

『絵本太閤記』（寛政九年（享和二年、七篇八十四卷八十四冊）七篇卷十二の末尾に、秀吉の側室「淀君」と正室高台院「ねね」の行状が記されている（『淀君行状』『北廳行状』。淀君はいわゆる「淫婦悪女」のイメージ、高台院は「貞婦才女」のイメージで、対照的に記されている。とくに淀君の淫婦悪女ぶりは、本作の中でも際立っている。「淀君の乱行などというのは、江戸時代の臆説である」（『国史大辞典』山本博文執筆）、「これら淫婦悪女説は徳川方の手で行われた悪宣伝とも言われる」（『日本伝奇伝説大事典』田中友季子執筆）などと言われているが、徳川方の手で書かれたわけではない『絵本太閤記』こそが、淀君悪女のイメージ形成に大いに関与したと考えられる。

本稿は「淀君行状」の中でも怪奇的で異彩を放つ「蛇体変身」の場面について、重要な関連文献と考えられる『唐土の吉野』（天明三（一七八三）年）巻三の一「桂の方金龍の法を修して肉親を殺す」との関係考察するものである。

一 淀君説話

淀君は、豊臣秀吉の側室で、秀頼の母である。父は浅井長政、母は織田信長の妹お市の方。幼名お茶々。お市の再婚相手柴田勝家が賤ヶ岳の戦いで敗北したのに伴い、勝家とお市は自害。お茶々ら三姉妹は秀吉の庇護を受けることになるが、やがて寵愛を受けたお茶々は懷妊、山城の淀城を改築して与えられ、淀と呼ばれる。誕生した男児は早逝するが、再び男児を産み（これが秀頼である）、伏見城西の丸に移り、権勢を振るう。秀吉の死後、遺命により大阪城に移るが、徳川家康との戦いに敗れ、元和元年（一六一五）年に秀頼とともに城中で自害する。主要な伝記的研究として桑田忠親『淀君』（人物叢書 吉川弘文館、新装版一九八五年）、福田千鶴『淀殿 われ太閤の妻となりて』（ミネルヴァ日本評伝選 ミネルヴァ書房、二〇〇七年）がある。

しかし、淀君説話に関する研究となると数少ない。金時徳「成熟していく歴史読み物」（井上泰至・金時徳『秀吉の対外戦争』（笠間書院、二〇一一年）と、網野可苗「7 秀吉と女性 虚像編」（堀新・井上泰至編『秀吉の虚像と実像』勉誠出版、二〇一六年）くらいである。

淀君を悪女として描く作品は、多くは徳川家を正当化する徳川史観に基づくものに多く見られる。網野は仮名草子の『大坂物語』（慶長二十（一六二五）年）、軍記の『難波戦記』（寛文十二（一六七二）年）、実録の『浪速秘事録』（大淫好色、恥を知らざる婦

人）らを挙げている。

先述したように「淀君行状」と「北廳行状」は連続している。「北廳行状」は、それ自身がねねを称える簡略な伝記になっているが、「淀君行状」は太閤が病に倒れ、石田三成へ名護屋を託したことから、淀君の動揺↓容貌減退への不安↓日瞬の金龍の法による美貌回復↓蛇の憑依と奇談的展開を見せる。

両行状の叙述形態は、片や伝奇的、片や顕彰風と、全く趣を異にする。淫婦悪女と貞婦才女という書き分けのためと言うには、「淀君行状」の『絵本太閤記』の中での書きぶりは異常である。前掲の網野は「本作において、淀に関する最も衝撃的な記述と言えば、『絵本太閤記』終巻に配された「淀君行状」の淀が蛇身となる話であろう」と、「衝撃的な記述」と表現した。とはいえこれが『絵本太閤記』の作者による全くの創造とは思われない。それでは淀君の蛇体変身を記した文献が『絵本太閤記』以前にあるのだろうか。

二 淀君登場場面

まず、『絵本太閤記』の中の淀君登場場面について検討しておく（『絵本太閤記』の本文は国文学研究資料館所蔵『絵本太閤記』（ナ4762-1～84）（国文研書誌ID20014406）の公開画像データ（オープンデータセット所収）による。漢字は原則として通行の字体に改め、適宜句読点引用符を付した。ふりがなは最低限にとどめ、省略した。括弧内は飯倉の注記、傍線は飯倉が付した。

淀君がはじめて登場するのは、浅井長政の小谷城落城の時（天正二年）で、頼る夫を失ったお市の方と三人の女子の行く先を説明する場面である。

此時信長の妹於市の方を小谷の方と申しける。御方の腹に一男三女あり。（長政は）いと愛らしく生立給ふを近く招き、（中略）藤掛三河守・木村小四郎兩人を添て、妻子を信長の陣に送らしむ。（二篇卷之七「信長大軍開小谷城」）。

（長政自害後、信長は）「長政の室家小谷方と稚き兒とは、尾州清洲の城主小田上野助信包に預け給ひ」（二篇卷八「浅井長政最期」）

その後、お市は柴田勝家に再嫁するが、その勝家の武運も尽きる。『絵本太閤記』は五篇に至つてあらためてお市とその子供達の生い立ちから、お市が勝家とともに生害し、子供達がそれぞれ引き取られていくさまを語っていく。

爰に勝家の北の方小谷の御方と聞へしは、故信長公の妹君にて、其名を於市殿の御方とぞ申ける。始め浅井備前守長政に嫁して三女一男を産給ふ。三人の女子は浅井滅亡の後、於市の方と俱に小田家に歸りて信長公のいたはりをうけておひ立給ふ。其後三人の女子を秀吉方へ送り遣すべしとて、其口上に、「勝家武運すでに尽き、明朝城中におひて生害を遂ぐべきに

候。夫に付此三人の女子は勝家が子にても候はず、故浅井長政が女にして、爾も信長公の因縁にて候。城中において俱に亡び候も便なく候故、送り遣しまゐらすの間、よきに痛はり給ふべし」との事也けり。富永委細承り、三人の姫達を引具し城中を出んとするに、姫君達泣悲しみ、「母上と諸共に同じ道に伴ひ給へ」とて右と左の手にすがり、転び臥て泣き給ふは、哀れ也ける次第なり。斯て有べき事ならねば、富永新六、三女子の手をとりて強て輿に乗参らせ、秀吉の陣に到り、しかじかのよし相宣ふれば、秀吉早速是を請取、三女の身の上聊か疎意有べからざる間、心安く生害遂らるべき条返答し、使者を城中に歸し給ふ。此姉姫は、後に秀吉公の妾秀頼の母堂淀君と申せしは此御方なり。其次は京極若狹宰相高次の室、末の姫君も高貴の簾中に備り給ひ、何もいみじく栄へ給ふは、則勝家が寸志也けり。（五篇卷之五「勝家籠北庄城」）

次いで、秀吉の五人の女君、北政所・松の丸殿・三條殿・加賀殿・淀君を紹介する場面で、二十三歳になった淀君を、次のように描く。

第五は淀殿、此は浅井備前守長政が息女、信長公の御妹小谷方於市殿の腹に出生し給ひ、柴田勝家北庄落城の節送り出し参らせし三女の内の姉姫にして、其時年十九、今年正十五年二十三歳に成り給ひ、容顔美麗、一たび笑ば百の媚なる傾

国の姿、秀吉公閨婦の中に第一位の艶色也。音声の妙なるは鶯の春霞を出て轉るがごとく、心倅弁にして気惻惻なり。その行爽やかに、爾も情あり。人若淀殿の一言を得る時は、死すといへども其心に叶ん事を需む。然ども性実徳なく、生得て嫉み深く、人を殺して猶足れりとせず、肉を喰らひ骨を碎くに至る。(五篇卷八「賜二佐々陸奥、守肥後国」)

ここに至って淀君の外貌・内面は余すところなく述べられてい。右引用部分の直後に北政所との対立の構図が描かれている。

尤才智は政所に対容すべし。其中に、政所は篤実の明、淀殿は虚慧の智なり。若政所を廢して淀殿一人を心の俤に威を行はせば、唐の則天皇后、我朝の尼將軍政子の方にも遙に勝るべき倅才なり。此故に政所と淀殿と左右に互角して才を闘はし、智を争はしめ、終に閨中の二將軍として其下風に立つ愛妃閨婦双方に分れ、政所に与し淀殿に党し、或は謀計を構へて、恥辱を与へ、又は白地に舌戦し、閨中の戦、人しれずといへども、恰も戦国諸侯の国境のごとし。その一方は政所を魁首として、三條殿、加賀殿是が副たり。忠臣には、おこひの方、朝日の局等御味方なり。一方は淀殿を大将として、松の丸殿副將たり。正栄尼専ら此党の功有者にて、淀殿も深く頼み思召す。(五篇卷八「賜二佐々陸奥、守肥後国」)

このあとの政局に二人の対立が大きく関わってくるという叙述になっているのである。さらに注目すべきは、それが可視化される五篇卷八の二十四丁裏・二十五丁表の挿絵である。右に「北政所之像」、左に「淀君之像」が描かれる。特に淀君像の上部には大蛇が描かれているのは、後述する「淀君行状」の蛇体変身を予示するものだと言えよう。

五篇卷九「佐々成政生害」「北政所茶会饗」「淀殿」「黒百合滅二佐々」では、いわゆる黒百合事件のことが語られる。

天正十六年春、北政所に厚遇を受ける佐々成政はその御礼として旧領越中の白山大汝山の險難の地に咲く黒百合を取り寄せて献上した。北政所はこれを見せようと、茶事に詳しい利休の娘綾女に命じて準備させる。直後に利休の娘は太閤に戯れかけられ、自らの仕える淀君のところへ駆け込むが、淀君は、北政所の茶事に趣向があれば教えよと迫り、弱みを握られた綾女は黒百合のことを伝えてしまう。淀君は自ら黒百合を手配し、松の丸殿の花筒に賤しい花に交えて黒百合を生け捨てておき、北政所を驚かす。北政所一派は佐々を貶め生害に追い込んだ。

北政所と淀の対立は、それぞれが加藤清正と小西行長に肩入れすることで、大きな影響を与える(五篇卷之十「賜二加藤清正晏茶羅旗」)。

また六篇卷之一「殿下被レ召二利休之女」でも、北政所と淀君の対立が描かれる。天正十八年三月、双方が問者を忍び込ませる背景が述べられている。

此頃政所は聚樂の城、淀君は大坂に座^をけるが、兼て政所の御方、淀の御方といつとなく党を結びし奥の女中、三條殿・加賀殿・松の丸殿を始めとし、末々の婢女にいたる迄、京と大坂に引別れ、双方より問者を入、忍の者を入込せ、心裡の戦日々に止す。

天正十九年四月、淀君は若君を出生し、五十を超えた秀吉は溺愛するが、同年九月に若君は早世する（六篇卷之二「朝鮮征伐之評議」）。朝鮮征伐が始動し、先陣を争う加藤清正と小西行長はそれぞれ北政所と淀君を訪ね、互いに負けじと、その戦略を語る（六篇卷之二「朝鮮渡海定先鋒」）。清正と行長それぞれの後ろ盾に北政所と淀君がいて、「戦功がライバルに劣れば面目を失うから、必ず高名を挙げよ」と命ぜられているため、軍が中和を得ず、完全な勝利を得ることが出来ない（六篇卷之五「小西行長為^レ入^二大明^一」）。

一方、関白を継いだ秀次は悪行を重ねて反省の色がなかったが、これには淀君が関与していた。淀君は秀次に太閤はますますご満足と消息し、淀君の侍女を「おまん」と称して秀次に献じ、悪事に荷担させ滅亡に至らしめた（六篇卷之十二「秀次公悪行」）。

『絵本太閤記』の作者武内確斎は、秀次の悪逆の源は淀君と石田三成だとし、淀君の怜悧と妬心が、秀吉の判断をも誤らせたとする。

秀次公生得殘忍におわしけれども、惡逆の募し源は淀君と三成がはかりごとなり。淀君は天下に並びなき嫉妬深き御方にて、人の上の御事にても、うるわしき女房の人の寵愛をかうむると聞しめしては、我身の上の事に思ひなして、憤り恨み給ふ事常の御氣質なり。秀次公天下にもとめて選み出し給ふ美女三十余人、ことごとく御寵愛深く、男女の君達多く出来させたまふなど、皆淀君の忌み妬み給ふ所にして、是を殺して猶飽足らず、骨を刻み肉を醢^{しづしお}にする漢の呂后、唐の則天なんど淀君と其生得相似たり。かかる妬心を以て深く久しく讒言を入給へば、太閤も初の程こそ実とも思し給はねども、三^{みたび}伝^{みたび}市虎一人皆信といへるがごとく、いつしか左もあるべしなんと思ひ付け給ふは、雷^{あまなり}の石に穴するに等しく、終に畜生塚の因縁とはなれり。淀君の麗利なり又妬心の深きは、此太閤記全部の中、拾遺等の中に往々しるしたり。互見して知るべし（七篇卷之四「畜生塚由来」）

三 淀君行状

右引用の末尾部分に「拾遺」とあるのが、本稿で問題とする七篇卷之十二の「淀君行状」であろう。長文なので、その概要を四分して述べる。

① 慶長三年、秀吉は再び肥前の名護屋へ御出陣の予定だったが、五月ごろから気分優れず、周囲の心配する中、石田三成を召し、自分に代わって指揮を執るように命ず。これにより三成の勢力は増

大する。太閤にもしもの事があればと諸国の大名小名は、北政所側・淀君側に別れて与した。北政所方に有力大名が多く付き、淀君は妬心深く思い暮らしていたところ、あまつさえ、若君の顔が太閤に似ていないと政所方から噂を立てられて深く恨んだ。淀は自らの味方を増やすため艶言を以て懷柔すると、参仕するものも少なくなかった。

② 淀君は、太閤に死なれたら北政所の思いのままとなり自分の立場はなくなると思い煩っていたが、ある朝鏡に向かうと、自身の容色が衰えてしまっていることに気づき寝込んでしまった。

③ 明国から来朝した日蓮宗の日瞬は、法力のある僧侶で人々の病苦を祈禱で治癒していた。淀君は日蓮宗を尊敬していたので、日瞬を招き、容色の回復を願う。日瞬は謹承し、「金龍の法」という祈禱を行うという。そのために淀君の内股の肉を切り取り、これを携えて富士山に登り、行法を行うと、大蛇が顕れ激動する。日瞬は淀の肉を与えて食わせ、蛇の肉を切り取って持ち帰り、淀君の内股の傷口に納めると、淀君の容色は忽ち回復した。

④ 淀君の艶色は周囲の者を蕩かし、内寵を蒙る者は甚だ多かったが、これは妖蛇のなさしむる所だった。淀君の嫉妬心はいよいよ深まり、口が耳まで広がるなど蛇体化したのが、半時ばかりして鎮まり、妖艶の姿は常と変わらなくなった。これを近く仕える者から家老用人まで聞き伝えて不思議なこととささやき合った。

四 『唐土の吉野』 卷三「桂の方金龍の法を修して肉親を殺す」との関係

四一 桂の方と淀君

『唐土の吉野』は、天明三年（一七八三）年刊、大坂伊丹屋善兵衛を版元として刊行された半紙本五卷五冊の十篇の短編を集めた読物で、前期読本に位置づけられている作品である（江戸怪談文芸名作選第二卷『前期読本怪談集』国書刊行会、二〇一七所収）。作者は版元の伊丹屋善兵衛こと前川来太（序の撰者）である。

第六話「桂の方金龍の法を修して肉身を殺ぐ事」（以下「桂の方」と略記）は、次のような話である。

東国の或る大守は四十になっても子がないたため、妻の甥を養子とした。しかし大守六十の時、側室桂は男子を生むや、大守を籠絡し、奸計を以て養子を追い出さんと謀り、また美貌を保とうと、日榮という法華僧に金龍の修法を頼み、陰部の生肉を贅として法力を得たが、大守の死後は家士に見放されて、我が子を食い、蛇となって姿を消す。

そもそも、秀吉と淀を想起するような筋だが、とくに、法華僧の唱える金龍の法に従い、生肉を与えて容色を保つくだりが「淀君行状」と酷似することが注目される。以下、『唐土の吉野』の本文を挙げて検討する。本文引用は前記『前期読本怪談集』に

よる。左訓は括弧内に記す。

老爺は御年六十ちかうならせ給ひて、はじめて御子をまうけ給ひしかば、御悦びはんかたなく、連城の壁を得たるより勝にめでたうおほしめされて、即別室をしつらひ、桂親子を安下給ひ、日夜の寵愛、給人の奔走たとふるにものなし。

此の桂といへる女は、山城の国淀わたりのおひたちにて、父母の名もさだかにきこえざるほどのいやしきものにしあれど、天性の殊色にてざえかしこく、音声よりたちふるまひまで、いかにも上臈と見えたるに、其の心正しからず、ものねたみつよく、暴疾ふるまひ多かれど、矯飾て其のけしき聊見えざりしが、

右の引用部分は「淀君行状」とは重ならないが、『絵本太閤記』が描いてきた淀君の描写と似通っていることに留意すべきだろう。「山城の国淀わたりのおひたち」というのもそのヒントである。つまり「桂の方」は、淀君の淫婦悪女ぶりを意識した創作なのである。さて、「桂の方」では、桂が次のように太守に訴える場面がある。

妾がいやしき身の、かくまで君の恩をかうぶりまゐらせ、かたじけなう若君さへ生れさせ給ひし事、いかなる宿世の契にやと、露わするる間なく、ありがたう思ひ奉る所に、何やら

ん君が御寵愛をねたみて、奴家がかうみまゐらせし若君の御おもざし、某に似て、君の御かんばせに異なりなどと、局方の密語侍るよし、君にも聞しめさせ給はん。妾何等の情ありて、かく海山の御恩にそむきて、他人の胤をいつはらんや。是なん申さぬとても、君こそ御おほえましますらめ。さるをかく取沙汰つかうまつるは、妾を妬む人ありて、更に若君のましますをいぶかりおもふ僻心なるあたりよりかも、いひふらして、妾と共に若君を君にうとませしめんと、こしらへごととは推しまゐらせども、衆口金鉄をとらかすのならひにて、遂には御たねにてなきなどと、君の御辱に及ぶ事をうたはせて、いかに聞流しさふらふべき。ただ何となく妾に御いとまをたまはらば、若君もろとも自尽して、君の御名をいさぎよくなし奉らん

「淀君行状」は、「剩へ若君の御貌太閤に似給はぬとて政所方の人々兎角に私言あへるなど深く恨み思めしあわれ一人にても方人と頼む人の多かりしと大名小名陪臣に至る迄、艶言を以て之を懐け」と、「桂の方」に比べれば簡略だが同趣旨の内容である。

四十二 「桂の方」と淀君の変化の描写

さて、「桂の方」が容色の衰えを鏡で自覚し、日蓮宗の僧侶の法力を借りて艶色を取り戻し、蛇体化する一連の展開は、「淀君行状」でも全く同様で、文辞も一致するところが多い。以下、やや

長文にわたるため、本文をいくつかに分割し、それぞれ文辞の似る部分を、アルファベットの大字と小文字で対応させてみる。

○「桂の方」 1

（前略）A「われかく殿の寵を得て、諸人のうやまひを受けるといへども、今御病たのみすくなう見え給へば、山高水低の後には、わがたのむかたを失へるに、時を得て、養君をはじめ古老の臣等、かねてわが計し事をばいぶかり、目を側て候ふ上、B若君は御幼稚といひ、Cましておもさしの父君に肖給はざるなど疑ひけるこそ、近臣某とみそかごとありしを、はからずも洩聞えてや沙汰しけん、いとかしこきをりからにこそ」

○「淀君行状」 1

c 剩へ若君の御貌太閤に似給はぬとて政所方の人々兎角に私言あへるなど深く恨み思めしあわれ一人にても方人と頼む人の多かれし眸を凝して人を釣給に又茲に甘心し命をすてて参り仕る者少なからず。然に今年五六月に至りて太閤御心地常ならず見へさせ給へば、淀君深く心を苦め給ひ、つらつら思惟し給ふに、「a今我太閤の寵愛を蒙り、威勢人の下にあらずと雖も、若や不予の御事有て太閤におくれ参らせなば、b若君は御幼稚と申し、何事も政所の思召のままに成り行きて、我は有てもなきがごとくにや有ん」

○「桂の方」 2

Dと思ひわづらひて目を経しに、或暁鏡を取て、むかひ照らせ

ば、こはいかに、ありし艶顔たちまちにおとろへて、皺などあさましうよせて、色は青にしらけたれば、みづからおどろきしばし言にも出ず。ただためいきのみつぎてありしが、ややありておもへらく、

「妾已に殿の目をかすめて諸人にしたしみ、威権を他にゆづらじとたくめるものは、Eわが容色を待て、衆をなびけんとおもひしに、いかなればかくおとろへ疲て、殿に後れあらんには、何を以てか諸臣を回み親んや。かくては日比われを怨るともがら、皆養君をたすけ参らさば、兼て計りし事ども、尽くあらはれて、若君諸とも、此の館に住事あたはざるべし」と、或はいかり、或はなげきて、

「Fたとひ命数は限りありとも、容色に於ては此のままにて衰へざらんこそ、女の願ふ所なるに、かくあさましくなりゆかば、いかでか養君奥方を失ふ時を期すべき。いでやいかなる荒行をも修して、神仏の力をたのみて、顔色ふたたびわかやぎ、心中の鬱憤を散ぜんものを」

○「淀君行状」 2

dと思ひ煩はせ給ふ事、数日なり。或曙鏡に向ひ御面影をうつし、細かに御覧有けるに、此頃の御物思ひにやさしもうるわしき花の顔ばせも、肉落て色青み、はやくも肌に皺を生ひたり。忽ち大きに驚きたまひ「こは口惜しき事にて有かな。もしや太閤におくれ参らせてもあはれ天下の諸侯を味方に引入、吾威権をして他の人に譲るまじと思ふは、e只我容色のうるはしきを以て人を釣

の外に出ず。然るにはやく色衰へ容貌憔悴たらんに、いかでか人と親しまれんや、^f 譬命に限り有とも佛の變らで積る年ならば物思ふ事のあらじかし」と、引かづひて臥給ひしが、

○「桂の方」 3

と、年頃帰依する所のG日榮といふ僧を請じて、^低声ていへらく、

「妾兼て法華經を信じ、御僧の教化によつて、宗旨の奥義を承るに、此の宗の密法に、荒行を修して祈る時は、一の願をば叶るよし、果してしからば、万望其法を授給はるべし。いかなる難行をも厭はずとむべし」

○「淀君行状」 3

爰に大明国より来船せし僧に、^g日瞬といへる者あり。(中略) 淀君は信長公の御姪女にして^h元来日蓮宗を尊敬ましませば、此日瞬が異驗有事を聞しめし、かねてより、伏見の里にめし登し、瑞龍院といへる一寺を賜ひ、常に帳内に立入て御帰依尤深かりにし、俄に^g日瞬を招き、^h密かに仰せ有りけるは、「汝日來人の難病を祈り苦しみを救ふ事甚だ多し。一人も其験の有ざる者なし。誠に常世の広徳我深く是を尊ぶ。今我身に一つの大願有。祈りて験有べくばいかなる荒行苦行といふとも、我自ら是を修せん。」

○「桂の方」 4

「罪業のほどあさましうこそおぼしめすらんが、ⁱ妾が願ひは、後

の世の事にあらず。現の我身をして、容色心力永く衰へ疲れず。ねたし悪しと思ふほむらを養て、行末心のままに榮耀をきはめんには、いかなる来世の苦みを受るとも、更になげくべからず」と、

○「淀君行状」 4

「ⁱ抑我願といつば来世成仏の望にあらず、現世に福をいのるに非ず。只我身の姿色衰へず嬋媚くして幾年をも経ば我望み既に足れり」。

○「桂の方」 5

日榮もおそろしくやおもひけん、一言の教化をも説かず、心よくうけ合ひて申けるは、

「いかにも其の密法を授け候べし。およそかかる願ひを叶へんには、^j金龍の法とて。其願主一七日が間、火食を断て冷水に浴し、^k關東八所の靈山に登りて、密法を行ひ、終に富士山に於て其法を成するに、金龍の形を現せしめてこれを祭るに、きよらにあぶらづきたる女の、陰所にちかき生肉を以て贅となし、又瓶に美酒をたたへて供物となす時は、金龍これに感して其願ひを成ぜしむる事、密法の奇特疑ふべからざる所なり。しかりといへども^k百里の山川を越て、婦人の身にてかかる荒行は修しがたければ、御身の肉を截て、愚僧に託せられば、これを携て、諸高山を巡り、法を修て龍の生肉を取て、君の御疵口へをさめば、心力の衰疲たるを復(ものとのごとく)して、いかなる大望をもかなへずといふ事なし」

○「淀君行状」 5

日瞬笑ふて、「二中略」に爰に金龍の法と申す尊き祈の候。此法を行ふ時はいかなる願といふとも満願せずといふ事なし。是を修するに富士山に登り、山氣龍氣を相呼んで修行なし候事にて、中々以て金闔の深きに育れ給ひ、殊には人の唱へ尊き御身の、いかでか上百里の山川を涉り、富士の山谷に野行あらせられんや。あはれ御生身の肉一寸を切て拙僧に賜らば其肉身に經文を読み入れ、俱に行法を積て御願を充し奉ん」と申ければ、

○「桂の方」 6

桂は元來剛氣の生れつきなれば、少しもおそれず、大によろこびて、厚くこれを謝して、即内腹の肉一寸許を切て、日榮にあたへてねんごろにたのみければ、日榮これを持て、伊豆駿河の諸山を巡りて行法を修し、なかんづく甲斐の国身延七面山は霧深くして咫尺をわかつたざるを、心氣を澄、呪を修して奥深く入り、終に富士の絶頂に上りて遍く山中を探り、洞底の洞口をもとめて、行法を修る事。三七日にして、符を投すれば、猛然（たちまち）として天地震動し、山谷雲起霧閉て闇夜のごとく、疾雨迅雷（しんどうくわんげん）に乘じて、金龍の光曜（ひかり）がやく、眼を奪ひ、魂を消すばかり現れ出れば、日榮其まま桂が肉を投じ、美酒をあたへて、猶も行法おこなふが、金龍肉をくらひ酒をのみて、ほればれと酔へるがごとく、頭を低て近よる所を、日榮戒刀を把て、其肉一寸許を切取て呪をとなく、経を念すれば、金龍

忽ちかたちをかくして、雲晴雨収て歸路を促して、即日桂が許に到て彼肉をあたへて、桂が疵口に補はしむれば、其のまま癒合て、少も癒を見せざる事、奇といふべし。是より桂が顔色衰を復し、嬌態（きやうたい）はでなすかた。旧（もと）に増り、氣力もますます壯盛（さかん）になりて、大酒をこのみ、淫欲に耽り、老爺の病中を幸に近臣の美少年を帳内（ねやのうち）に招て、乱行言語に絶しける内に、（中略）桂は少も動ぜず、色を作り声をやさしうして、応捕的にむかひ、「みづからは先殿の遺命を承て、若君を守護する所に、你毎何故にかく唐突に及ぶや。近よりは目に物みせん」と、（後略）

○「淀君行状」 6

淀君、大きに飲び給ひ、元來心氣勇壯の女性なれば、短刀を抜て内股の肉一寸計切取て賜ひける。日瞬携へて東海道に馳下り、先伊豆駿河の山々より入て、甲斐に身延七面山霧深く峯にむすぶを深淵の水に写して地を縮め、富士の山谷を踏遍して、終に三つ股川の河岸に立て行法を修する事三七日、忽ち川上鳴動して、逆浪高く發りて岸を崩し、急雨篠を乱すがごとく、黒雲四方を塞で日の光を蔽ひ、数十丈の大蛇顕れ出、爪を鳴し角をふり立て、雲中に翻翻（ひんぱん）せり。日瞬いよいよ、丹誠をこらし、符を以て大蛇を近く招き、彼淀君の生肉を与へて是を喰しめ、又蛇の肉一寸を切取て符水の中におさめ、遯覆の法を行ひて大蛇を去しめ、道を急ぎて伏見の城に歸り、淀君に謁し、蛇肉を以て内股の疵口に納め、

「今は御願成就せり」とて退きけるが、暫時の間に肉全く癒合て、露計の痕もみへず。是より淀君の御容日毎にうるわしく、顔の賦のつややかなる事は、桜花の露を含めるごとく、視る者心を蕩かし志を失ふ。淀君も亦淫心頻りに生じて制しがたく、大野が一党、渡辺が従類を始めとし、帳内に仕ゆる少年、内寵を蒙る者、甚だ多し。

○「桂の方」7

Mはたと白眼し顔色朱のごとくに変じて、眼の光あたりを奪ひければ、さしもの人々目くらみ力すくみて進事を得ず。猶予して見えけるが、一人気を勵し立寄りて手を取れば、其熱き事烈火のごとし。

○「淀君行状」7

m顔色変じて朱のごとく、心熱頭上に突出て焰と成り、(後略)

以上、並べてみると一目瞭然で、「桂の方」と「淀君行状」の文章は一致・類似しているところが多くある。とくに日蓮宗の僧侶が「金龍の法」を以て若返りの秘術を行うところは、重なるところが多い。

四一三 挿絵の比較

また挿絵においても、その構図が似通っている。『唐土の吉野』で法華僧の日栄が、大蛇と対する場面の挿絵(巻三、三ウ・四オ)では、右面に日栄が左面に大蛇が描かれ、川岸に立つ日栄が、川

波から顕れた大蛇に法力を施そうとしている。『絵本太閤記』の岡田玉山も同じ場面を描き(七篇巻十二、六ウ・七オ)、構図は基本的に同じである。日隣の表情、荒れ狂う川波、大蛇の迫力とどれをとっても玉山の絵の方がその精緻さと迫真力で勝っているが。

また『唐土の吉野』の挿絵では、施術を受けた後の桂の方の着物が鱗形文様になっている(巻三、十ウ・十一オ)が、『絵本太閤記』の淀君もまた、鱗形文様の衣裳で描かれている(七篇巻十二、八ウ・九オ)。「淀君行状」が「桂の方」の本文を撰取しているとすれば、挿絵の構図も同様に倣った可能性は大きいだろう。

五 「桂の方」は「淀君行状」の典拠か?

以上を踏まえると「淀君行状」の蛇身変化のストーリーは、「桂の方」と関連があることは明らかであろう。しかし、「桂の方」が「淀君行状」の典拠であると断言はできない。そもそも「桂の方」のストーリーは、淀君のイメージをかすめていると思われるので、「桂の方」以前に、淀君を主人公としながら「桂の方」と似た本文をもつ典拠Xを想定することも可能だろう。「淀君行状」は典拠Xを参照したのかもしれない。

『唐土の吉野』の各篇の典拠については全貌が明らかにされているわけではないが、第五話「大隅小平太奸計を以て寡婦を犯す事」が『懷硯』巻五「弟の似せ男」の、第九話「幽霊芭蕉の舞を奏て実誼を告る事」が『怪談登志男』巻二の三「亡魂の舞踏」の、ほぼ丸取りであることが判明している(徳田武「馬琴と『杜鰲新

書』(下)「騙術の系譜を論じて逍遙に及ぶ」『文学』一九八一年五月、井上啓治「『唐土の吉野』序論・附翻刻―前期戯作研究(二)―」『就実論叢』十六号、一九八七年)など、先行のテキストを利用することが多い。「桂の方」についても、何らかの典拠が予想されよう。

しかし、どちらかといえば、「淀君行状」は「桂の方」を参照した可能性が高いのではないだろうか。それは、「桂の方」の蛇体変化の場面が一種の幻想譚であり、『太閤記』物やそれに連なる実録的読み物には、それが見いだされにくいと考えられるからである。

『絵本太閤記』巻六以降の大きなトピックである朝鮮出兵や、秀次乱行、また利休説話などは、北の方と淀君との対立が底流にあるという解釈で一貫している。その際、淀君の性格を蛇性と結びつけることで、北の方の正しさ、誠実さを、一層際立たせるという構図を実現したのである。淀君を寵愛した秀吉がそもそも悪いという批判に対しても、淀君が実は蛇性だったからやむをえなかったという、秀吉擁護の論理を引き出すことが可能になる。

結果として「淀君行状」の怪異は、『雨月物語』『蛇性の姪』に代表される〈女人蛇体譚〉の系譜に位置づけられることになるのである。